

Stephen Crane: The Open Boat

—— 短篇小説の技巧 ——

神 崎 浩

1897年の正月、コモドア号はフロリダからキューバに向けて武器・弾薬を積み込んで出発した。その日の夜中から荒れた海のため浸水が始まり、深夜の2時半頃、全員は船を捨ててボートに移り、3時過ぎにはコモドア号は沈没してしまった。

たまたまこの船に Crane はキューバで戦争の取材をするために乗っていて、このボートでの30時間に及ぶ漂流を体験した。この時の様子は Crane 自身の筆で、*Stephen Crane's Own Story* として1897年1月7日付けの“New York Press”紙に載せている。しかし、その内容はコモドア号の出航から沈没に至までの状況が、彼の目を通して描かれているが、漂流に関してはまったく触れられていない。

恐らく彼は手記を新聞に書きながら、一方ではこの貴重な体験を次の自分の作品に取り入れようと考えていたのだろう。Scribner's Magazine の7月号に、その体験を基にした作品、*The Open Boat* が発表された。そして翌年、*The Open Boat and Other Stories* のタイトルで単行本として刊行されている。

The Open Boat は Crane の主要作品であるにもかかわらず、他の作品とはスタイル、性格描写、調子などの点でかなり異なったものとなっている。Crane は *The Open Boat* の筋書きに関しては何も作り出す必要はなかった。ただ自分の体験を忠実に書き現わすことに専念すればよかった。そのために、実際に起った出来事と作品を一致させるための異常なまでの苦労があったようである。自分の書いたものが事実と合っているかどうか

を確かめるために、コモドア号の船長にも問合せしているほどであった。

新聞紙上へ発表された *Stephen Crane's Own Story* ではオープン・ボートによる漂流に関しては、固く口を閉して、ただ “The history of life in an open boat for thirty hours would no doubt be instructive for the young, but none is to be told here and now.”⁽¹⁾ とだけ言っているが、Crane は荒海に翻弄されるボートの中で、まるで戦艦のデッキにでもいるかのように泰然として命令を下していた Murphy 船長の「素晴しく男らしい姿」を、すぐにでも小説に書きたいと言っている。さらに、終りの部分で “... lying with his forehead on sand that was clear of the water, and he was dead.”⁽²⁾ として描れている給油係りの Billy Higgins に関しても同様の考えを持っていた。そして Murphy 船長の物語は、1897年8月に *Flanagan and His Short Filibustering Adventure* として書かれ、Billy Higgins は *The Open Boat* の中で Crane と思われる報道記者と一緒に、海と人間との戦いを通して描かれたのである。

The Open Boat は、人間と自然の間の永遠に続く戦いと、夜の海を漂流することで自分自身の能力の限界を知るという、極限状態に置かれた人間の行動を描いた物語である。航海に関する細部や海上での珍しい出来事に関しては、Crane は興味を示していない。背景はあくまでも附随的なものである。ただオープンボートに乗っている、船長、給油係り、コック、報道記者の四人の行動と海そのものだけが、Crane の物語の比喩的な枠組となっている。船は欧米の文学の中では一つの重要な象徴として扱われている。W. H. Auden によれば、船には二つの見方があるという。つまり、大洋に浮ぶ一つの船というイメージから、社会の縮図として見る見方と、岸から遠く離れていることから、自由の象徴として考えられるのである。

If thought of as isolated in the midst of the ocean, a ship can

stand for mankind and human society moving through time and struggling with its destiny. If thought of as leaving the land for the ocean, it stands for a particular kind of man society as contrasted with the average land dwelling kind.⁽³⁾

報道記者の乗ったボートは、この二つの Auden のカテゴリーに一致する。

The Open Boat では、登場人物、出来事、状況、会話、筋書き、時間の経過等、短篇小説に必要な全ての要素が注意深く選び抜かれている。彼の *The Red Badge of Courage* や *The Monster* と同様に、この作品の中で Crane は素材を極端に単純化し、その出来事の中に必然的に含まれる究極の意味と価値に迫るために、物語の背景を最小限のものとしようと試みている。この物語の背後にある態度は、自然主義的であり、虚無的にさえ見えるし、彼の自然に対する観察は疑いもなくきびしいものであるが、一方その手法は写実的であり、超現実主義的でさえある。

ボートに乗った四人の男たちは、荒波の中で漂流し、自然の威力の前に曝されている。波は “most wrongfully and barbarously abrupt and tall.”⁽⁴⁾ という危険な状態の中で、報道記者は、微妙な男同志の友情がこのボートの中で生れ、それが各々の男たちの心を暖かくしていることを感じるのである。十分に漕いだ後、やっとのことで彼等は人が住んでいる岸が見えるところまでボートを近寄せるが、岸にいる男の合図を理解することが出来ない。岸の男も彼等の叫び声が聞えない。苦境の中で連絡を取ることに失敗してしまふ。

ボートの中でもう一夜過すという新しい苦難に堪えなければならない。“A night on the sea in an open boat in a long night.”⁽⁵⁾ 仲間意識は一層強いものとなって行く。静かな、望みのない、長い夜を過している間に、記者の頭の中には *The Open Boat* の中心的思想ともいべき考えが次第に出来上って来る。それは、人間は大して重要なものではない、という考えであった。

他の者たちが皆疲れ切って眠り込んでいる間、暗闇の中で一人ボートを漕いでいる記者は、次のように考え始める：

“If I am going to be drowned—if I am going to be drowned—if I am going to be drowned, why, in the name of seven mad gods who rule the sea, was I allowed to come thus far and contemplate sand and trees?”⁽⁶⁾

呪文にも似た彼の三度繰り返される叫びは、次の考えを呼び起すことになる。

When it occurs to a man that nature does not regard him as important, and that she feels she would not main the universe by disposing of him, he at first wishes to throw bricks at the temple, and he hates deeply the fact that there are no bricks and no temples.

.....

A high cold star on a winter's night is the word he feels that she says to him. Thereafter he knows the pathos of his situation.⁽⁷⁾

その悲哀は自然のあづかり知らぬところであり、人間に残されたものは、自分の面倒を自分で見なければならぬということなのである。

いよいよボートが再び岸に近づき、全員がボートから海に入って泳ぎ始める。三人の者は無事に岸に上るが、給油係だけは溺れ死んでしまう。

It seemed that instantly the beach was populated with men with blankets, clothes, and flasks, and women with coffee-pots and all the remedies sacred to their minds. The welcome of the land to the men from the sea was warm and generous; but a still and dripping shape was carried slowly up the beach, and the land's welcome for it could only be the different and sinister hospitality of the grave.⁽⁸⁾

溺死した給油係りの男に対しては、悲しいことに生存者たちと同様のもの

てなしは何も行なわれない。だが、自然は非難されるべきではない。死者はただ、あまりにも消耗しきっていたのであり、不運だったのである。そして、それが自然に抵抗した人間の落ち込む危険でもあったのである。しかし、一緒に苦しみ抜いた者同志の友情や生存者に対する温かいもてなし、さらに遠くから眺めた自然の美しさという償いはあった。それは試練に堪えた男たちに対する報酬だったのだ。

When it came night, the white waves paced to and fro in the moonlight, and the wind brought sound of the great sea's voice to the men on the shore, and they felt that they could then be interpreters.⁽⁹⁾

自然は強力である、だが人間の苦しみに対しては無関心である、ということを知った Crane は自然というものに対する定義と、自然と人間との関りに対する定義を作り上げた。彼はまた、人間対人間の関係を何か人間の心の奥にある神聖なものとして描写している。しかしそれは苦闘している間に偶然そのようなことに気付いたかのように描かれている。

The Open Boat は Crane が生涯を通して興味を持っていた「人間と自然の関係」というテーマを発展させたものである。もし彼の作品のテーマとなっている恐怖、死、勇気、アイデンティティー、孤立、などについて考察するならば、これらのほとんど切り離すことの出来ない抽象概念は、彼の自然に対する概念に非常に密接に関係していることが理解出来る。さらに、その概念が人間対自然の関係に対する彼の結論に深く係っていることも解って来るのである。Crane の作品では「自然」は三つの段階に区別されている。第一に外面的な目に見える自然、つまり木とか岩、草、動物などである。次の自然は、この宇宙における物理的現象を支配している法則、つまり季節の移り変わりや、気象状態など全体の状況を規制する原則を意味している。最後の自然は、宇宙と自然の法則を司どっている根本的な性格

を暗示する形而上学的意味を持ったものであり、単的に言えば「神」そのもののことである。

この作品の中に出て来る第一の表面的な目に見える自然は、ボートに乗った男たち、特に主人公である報道記者に、自然という一般的概念の中に本来備わっているもう二つの段階の自然の持つ意味を理解させようとしている。物語の始まりで、“These waves were most wrongfully and barbarously abrupt and tall, and each froth-top was a problem in small-boat navigation.”⁽¹⁰⁾ となっている海が、終りの部分では、“the white waves paced to and fro in the moonlight.”⁽¹¹⁾ と穏やかなものとなっている。この二つの間の時間的経過にはただ単なる天候の変化というだけではすまされないものが含まれているのである。始まりの部分で、海は荒れた危険な状態であることは、不安定な状況の設定が強調されるために重要なことであり、美的感覚からもそれにふさわしい状況となっている。同様に、物語の終りで、穏やかな従順な海が、命がけの冒険をした後で現われることは、少なくとも、始まりの時点での海の様子と比較できることから、計算された設定である。主人公たちの恐怖を読者も体験するように、ひと度彼等が救助されると、その恐怖心も和らぐのがこの海の変化によって表現されている。始めの個所で、海はボートを沈め、舟に乗っている四人の男たちを溺れさせようとしているかのように描かれている。波は“wrongfully and barbarously abrupt and tall,...”⁽¹²⁾ であり、あたかも何かの意志が彼等に対して働きかけているかのようなようである。全ての波は“just as nervously anxious to do something effective in the way of swamping boats.”⁽¹³⁾ さらに“it was not difficult to imagine that this particular wave was the final outburst of the ocean, the last effort of the grim water.”⁽¹⁴⁾ 波頭はあたかもボートの乗客に敵意を表わすかのようにうなり声を上げている。第二部ではカモメがボートに近寄って来る。この鳥を彼等は“uncanny and sinister in their unblinking

scrutiny”⁽⁴⁵⁾と見るのである。また “somehow gruesome and ominous”⁽⁴⁶⁾にも見えるという。だが、我々は海は敵意を持ったものではなく、カモメも実際にゾッとするような不吉なものではないことを知っている。しかしボートの男たちはこのことを思い知らされたのだった。第一部と第二部以後では、海が敵意を持っていることに関してはほんの少ししか書かれていない。それが再び現われるのは、終章に於てである。

第二段階の自然は、宇宙の物理的現象を司る法則の活動を含んで、いかなる物語、作品にも現われるのは当然である。すなわち我々は存在そのものや生理学的構造がこのような自然の中に限定されているからである。この世の中にある全ての物と同様に、我々は重力の法則であるとかその他の種々の自然の法則に支配されている。だから我々はこのような法則は当然のこととして、ほとんど注意を払ってはいない。だが、Craneの多くの作品ではその状況は異ったものである。彼は我々の注意を一般的自然に向け、その自然のある一つの特別な局面がその自然の営みと関係を生じるようにしむけるのである。彼は人間が十分にその潜在能力を認識するためには、人間は何んの束縛も受けるべきではないと考えていた。彼は自然の力が彼を抑制しようとしたことに基づいて、自然の無意識の力に対して意識的に自由を得ようとしたのである。

The Open Boat では敵役は明らかに表面的な自然である。しかし、目に見える自然だけがボートの男たちを脅かすのではない。彼等が生存できるかどうかは、疲労と常に差し迫っている破滅にもかかわらずボートを適切に操作する能力と同様に、彼等の苦闘のためにもたらされるほとんど堪え難い肉体的苦痛に抵抗する能力にかかっているのである。彼等は十分な休養も食物も取っていないし、ボートを操るために大変な肉体的努力を行わなければならなかったために、すっかり疲れ切っていた。彼等の肉体的状態は、生理学的原則から見れば、丁度海の活動が地球物理学的原則という見地から説明できるように、説明が可能である。自分たちが支配するこ

との出来ない自然の力に抵抗するには、自分たちの耐え忍ぶ意志の力を持ってするしかない。

この物語に於て、自然は人間に対して意識的に敵意を示しているのではない、ということが理解出来るので、ここに自然が意地悪の行為を行ったと同様に役に立ったことの実例をいくつか取り出して見よう。ボートの男たちが船長のオーバー・コートを帆の代りに使った時、風は大変に具合良く吹いてくれて、しばらくの間は漕ぐ必要がないぐらいに舟を進めてくれた。一見したところ動いていないように見えた海藻が、男たちにボートが岸へ向って進んでいることを知らせてくれた。船長が合図のための旗を作るために棒が必要となった時、ボートのそばに浮んでいるのを見つけた。物語の終り近くで、記者が海流に流されそうになった時、大波が押寄せて来て差し迫った危険から彼を救ってくれた。その波は、もしかしたら、給油係りの男を溺死させた波だったかも知れないのではあるが。

第三段階の自然は、神の力の現れとしての自然である。Craneは神を直接自分の作品の中に書き表わそうとはしていない。彼が人間と自然との間の関係を作品の中で書こうとする時、彼は人間と神との関係を効果的に書いているのである。だが、Craneが自然と神を同一のものとして扱っているというのではない。神と自然は決して同等ではないからである。しかし、Craneは神が自然を支配していると考えているのである。このことから、人間と神の御業である自然との関係は、人間と神との関係を示すことになるのである。自然の慈悲、敵意または無関心は神の慈悲であり敵意であり無関心なのである。

The Open Boat は一人の男、つまり報道記者が自然を直接に体験して、何如にそれを正しく解釈するかを学んだかを伝える物語である。その抽象的な事柄をはっきり示す個処が何個所か本文中から取り出すことが出来る。“If I am going to be drowned...”⁴⁷ を三度繰り返す部分はその最も明白な個々だと言えよう。Craneは“the seven mad gods who rule the

sea,”⁽¹⁸⁾ と書いた時、彼が何か特別な神々を頭に描いていたとは思えない。ただ人間の苦境に対して責任を持った抽象的な性格を持った何かが媒介している、少なくとも記者の眼には写ったことを意味しているのである。この何物かが、彼に救助される寸前まで来させて置いて、岸に到達する前に生命を断ってしまおうとしているように記者は感じたのである。彼はただ単にそんなに遠くまで来ることが「許された」のではない。実際は、無事だということがわかる所まで「連れて来られた」のだ、ということが次の行の “Was I brought here merely to...”⁽¹⁹⁾ の部分で理解できる。三度繰り返す部分は、ボートの男たちにとって、彼等の苦境に対して責任を持って介在しているものが「運命」だということ暗示しているのである。特にこの繰り返しが最初に出て来た直後、はっきりと “Fate” と名差している。この繰り返しは三度現われるが、その都度その中に含まれた意味は変化している。繰り返しの部分に続く個所から判断すると、最初に名差して呼ばれた「運命」はかなり複雑な姿の「運命」であると考えないわけには行かないようである。

During thin dismal night, it may be remarked that a man would conclude that it was really the intention of the mad gods to drown him, despite the abominable injustice of it.....

When it occurs to a man that nature does not regard him as important, and that she feels she would not main the universe by disposing of him, he at first wishes to throw bricks at the temple, and he hates deeply the fact that there are no bricks and no temples. Any visible expression of nature would surely be pelleted with his jeers.....

A high cold star on a winter's night is the word he feels that she says to him. Thereafter he knows the pathos of his situation.⁽²⁰⁾

ここで最早ボートの男たちは「運命」におびやかされることはなくなっ

ていたが、今後は「自然」を気に掛けなければならなくなって来た。ここでの自然は表面上の目に見える自然ではない。つまり海はここでは目に見える自然の現れとして嘲笑を受けているのである。また、物理的現象を支配する自然でもない。それは目に見える自然が自然の法則を現わしているからである。ここで言う「自然」は神なのである。そしてボートの男たちは神の無関心にもかかわらず、生きたいと望んでいるのである。神はまるで「高く冷たい星」のように、人間の苦しみから遠く離れて無関心でいる。このことは最後の一行の中で、ボートの男たちと自然との関係に関する問題点が、もっとはっきりとして来るのである。それはボートの中にいるという状況の持つ意味を、報道記者がどのように感じ取ったかを述べた一行なのである。ボートから記者は岸に立っている風車を見る。

This tower was a giant, standing with its back to the plight of the ants. It represented in a degree, to the correspondent, the serenity of nature amid the struggles of the individual—nature in the wind, and nature in the vision of men. She did not seem cruel to him then, nor benificent, nor wise. But she was indifferent, flatly indifferent.⁽²¹⁾

この引用に続く個所で、“impressed with the unconcern of the universe”⁽²²⁾ つまり「宇宙の無関心さに心を打たれた」と感じる部分がある。最初の行の意味は、自然を無関心な巨人に例えているのである。ここでの「自然」は表面的な目に見える自然である。それはまた「人間の目に見られた自然」であり、神のあかし宇宙に於ける物理的現象を支配する法則の仕組みまでは含んでいない。物理的な法則を特徴づける時、「無関心」という言葉がはたして適当なものだろうか。物理的現象そのものが無関心であって、「慈悲深い」物理的現象など有り得ないのではないか。風車の塔はただ単に「アリの苦しみに背を向けて立っている巨人」では無い。それは人間たちに背を向けている神なのである。「宇宙の無関心さに心を打

たれた」のは、宇宙の中心には何如なる慈悲深いものも存在していない、と考えることである。Craneはここで、人間は孤立した存在だと言っているのだ。

先に引用した三度の繰り返しは、自然の無関心さと、ボートの男たちのはっきりと口に出さない感情を述べたものだった。一番最後に同じ繰り返しをつぶやいた時は、報道記者が自分たちの苦境について述べたことであって、Crane自身が自然に対して矛盾を感じたのではなかった。ただ記者だけが自分と自然との関係を再評価したのだった。繰り返しの部分が暗示しているように、運命も自然も彼を溺れさせてしまおうなどとは望んではない。何如なるものも彼がそんなに遠くまで来ることを許してはいない。自然は好意も示さなければ不賛成も示さず、ただ無関心なだけである。この判断によって、最後になって給油係りが死ぬことも痛ましさを感ずることなしに受け入れることが出来たのである。自然も運命も、決して最良の者を、最強の者を殺したのではなかった。彼等の仲間のうちの一人を殺したのだった。誰でも良かったのだった。

参 考 文 献

The Works of Stephen Crane Vol. 12, Wilson Follett ed., Russell & Russell New York, 1963.

注

- (1) R. W. Stallman, ed., *Stephen Crane : Stories and Tales*, Vintage Books, New York, 1955 p. 265.
- (2) *ibid.*, p. 266.
- (3) W. H. Auden : *The Enchafed Flood*, Random House, New York, 1950. p. 66.
- (4) R. W. Stallman, ed., *The Works of Stephen Crane, Vol. 12*, p. 29.
- (5) *ibid.*, p. 47.
- (6) *ibid.*, p. 41.
- (8) *ibid.*, p. 61.
- (9) *ibid.*, p. 61.
- (10) *ibid.*, p. 29.
- (11) *ibid.*, p. 61.

- (12) *ibid.*, p. 29.
- (13) *ibid.*, p. 31.
- (14) *ibid.*, p. 31.
- (15) *ibid.*, p. 33.
- (16) *ibid.*, p. 33.
- (17) *ibid.*, p. 41.
- (18) *ibid.*, p. 41.
- (19) *ibid.*, p. 41.
- (20) *ibid.*, p. 51.
- (21) *ibid.*, p. 56.
- (22) *ibid.*, p. 56.